

フロイド・ダットソン
共著
リリアン・ダットソン

『中央アフリカにおける 少数インド人』

Floyd Dotson & Lillian O. Dotson, *The Indian Minority of Zambia, Rhodesia and Malawi*, New Haven and London: Yale University Press, 1968, xiv+409 p.

I

アフリカにおけるアジア人問題は、従来、ホリングスワース (L. W. Hollingsworth), デルフ (G. Delf), デサイ (R. Desai), ガイ (D. Ghai), カルピン (G. H. Calpin), ウッヅ (C. A. Woods), ミュラー (A. L. Müller) などによって論じられてきたが、これらの研究も、問題の重要さのわりには、量的にけっして多いとはいえなかったし、対象地域もだいたい東および南アフリカに限られ、また、その大部分が必ずしも明確な理論的枠組をもって書かれたとはいえなかった。そういう状況の中で本書が、かなり野心的な新しい「複合社会」論の提示という形で、中央アフリカのインド人移民についてその社会・経済構造を本格的に扱ったものとして上梓されたことは、同業者にとってまことに喜ばしいことであり、ことに、本書の刊行によりはじめてアフリカのアジア人が居住する全地域に関する基礎的資料が一応揃ったという点でその意義は大きい。

この研究は、もと1957年に、ルサカの「ローズ・リヴィングストン研究所」(Rhodes-Livingstone Institute)の調査プロジェクトの一つとして計画されたものであるが、その後、ダットソン夫妻がフルブライト資金を得て、1959年9月から1961年8月までの約2年間、中央アフリカ3国(当時のローデシア、ニヤサランド連邦)にフィールド・ワークを実施し、また、1966年夏に約2カ月の短期訪問をおこなって、その成果をイエール大学出版会を通じて世に問うたものである。ダットソン夫妻は、現在、アメリカのコネチカット大学で、社会人類学部の助教授および講師として共に活躍している。

ともあれ、本書は「中央アフリカの社会的環境の中でインド人の土着的諸制度がいかなる適応的变化をとげて

きたかを検討する」ことを直接の目的としているが、研究の基底にある問題意識は、前述のとおり、ファーニヴァル(J. S. Furnivall)の「複合社会」論への批判であった。つまり、ファーニヴァルがビルマやオランダ領東インド諸島での研究をふまえて展開した理論を、著者は中央アフリカにおけるインド人社会研究の原点に据えながら、結果的にはこれを批判的に再構成しているのである。著者はいう。「中央アフリカの社会は、それが人種的にさまざまな種族グループから成立しているという意味では、客観的にみて実際複合的であり、したがってファーニヴァルの概念も記述的にはある程度正当化されるけれども、筆者の考えによると、それは分析的概念としてはまちがっているばかりでなく、誤解を招きやすい」と。そして「まちがっている」のは、かれが個々の種族グループの歴史的相違だけに注意を集中し、かれらが相互に関係づけられるに至った過程や環境に関心が払われていないためであり、また「誤解を招きやすい」のは、かれの「複合社会」が、その論理的反対物として「単一社会」を指定するが、そのようなものは、昔はいざしらず、いまではもはや存在しないし、現実にはむしろいくぶんエキゾチックなセッティングの中に「近代社会」ないし「文化的に西欧化された社会」が存在するだけで、「複合社会」と称するにあたいする特別な社会があるわけではないからだ、としている。おそらく、ダットソン夫妻にしてみれば、ファーニヴァルの「複合社会」の概念が、1950年代のはじめに、イギリス植民地省や、ローデシア・ニヤサランド連邦政府によって、いわゆる racial partnership 政策の理論的根拠としてしばしば援用され、しかも、住民の人種・文化的異質性の強調が、往々この国の人種差別政策の弁明のために利用されてきた記憶が強く残っており、これに対して暗黙の疑問を投げかける含意があったのであろう(「複合社会」論に対する著者の基本的な見解は、巻末の付録に詳しい)。

ともあれ、著者の「複合社会」批判で注目される点は、それが「規範的機能主義理論」(normative-functionalist theory)への批判という形で、より広範な専門的視野から問題点が論じられていることである。かれはそこで既成理論を揚棄した新しい「複合社会」論のメルクマールとして次の7点をあげている。すなわち、(1)社会は文化に先行する。(2)文化は「適応的」(adaptive)であり、「補助的」(instrumental)である。(3)文化はすべて「適応的」であるが、みな均等にそうであるとは限らず、諸々の種族グループ・社会の中に社会的権力の差異を生ぜ

しめる文化的根拠もその点に存する。(4)文化的優越性は、歴史上、種族間関係における社会的優位の中に示されてきた。(5)西欧帝国主義は、文化的に「世界の西欧化」をもたらした。(6)民族主義は、世界政治レベルでの一つのさししまった社会的統合形態を示すものである。(7)新興民族国家は、新たに多数者・少数者の関係をつくり出し、種族間抗争が継続する基盤となっている。

II

本書の構成をみると次のとおりになっている。

まえがき

第1章 種族集団と社会

第2章 歴史と入植

第3章 インド人の経済的役割

第4章 宗教の伝統

第5章 カーストの遺制

第6章 家族と世帯

第7章 インド人内部の統一と分裂

第8章 インド人とヨーロッパ人

第9章 インド人とアフリカ人およびカラード

第10章 独立以前のインド人政策

第11章 新興国における外国人

附 録 「複合社会」論批判

文 献 目 録

第1章は、いわば introduction であり、簡略な叙述の中に著者の基本的視角が集約されていて興味深い。著者はまず、中央アフリカにおけるインド人を、古典的地中海文明における古代アイルランド人、中東・北アフリカにおける近代ギリシャ人、西インドにおけるベルシャ人、東南アジア（ビルマを除く）における中国人などと並んで、「外来」中間商人（マックス・ウエーバーの用語として）と規定し、かれらが土着民より経済的に優位をめている理由を、その権力の性質と機能を通じて、「社会学的民俗学」(sociological ethnography)の立場からとらえたいと述べている。したがって著者の分析視角は、通常の社会人類学者のそれとはかなり趣きを異にしており、本書でも、インド人の権力構造に関わりをもつ限りで、西欧帝国主義やアフリカ民族主義の検討がなされている。もちろん「人間のメンタリティは文化的である」から、インド人の文化的側面も当然扱われるけれども、その場合、著者にとっては、「個々人の具体的集団と、その制度的形態との間にある文化・社会的諸要素の

相互作用を明らかにする」ことのほうがさらに重要となる。その意味で、ダットソン夫妻の立場は、社会が文化に同化されるものとする「規範的機能主義理論」に鋭く対立するものといえる。

なお、研究の発表形式について著者は「本書は現代社会学理論の基本問題について最終的解決を与えたものではなく、既存理論の適否を経済的データに基づいて検討し、これを補足する方向で若干のアイディアを提示したにすぎぬ」と述べ、また、実態調査の方法については、ザンビア、マラウイおよびローデシアの3国からランダムにデータを拾う一方、特定コミュニティの集中的調査をおこない、その双方から作られた約350点の資料を適宜組み合わせて判断の材料にしたこと、さらに、面接聴取に際しては、信用に値する人物に質問をする場合以外はだいたい住民の発言における建て前と本音とのギャップに留意してできるだけ問わず語りに真実を引き出すくふうをしたことなどが語られる。

第2章では、まず中央アフリカ全般におけるインド人定着のパターンが概説されている。すなわち、東および南アフリカの場合と比較して、インド人定着の歴史が新しいこと、移民はヨーロッパ人入植者の要求に基づいてなされたのではないこと、インド人社会はグジャラティ出身者が多く、比較的同質的であること、移民はヒンズー教徒と並んで回教徒もいるが、Shia Ismaeli や Shia Bohras などはいないこと、中央アフリカに流入したものは大部分“passenger”（自由移民企業者）で、“indentured”（契約労働者）はほとんどいないこと、などをあげ、さらに、一般に投資植民地であった地域では、イギリス植民地省がインド人を含むすべてのイギリス臣民の移動について公平な扱いをするのを原則としながら、現地のヨーロッパ人入植者は経済部門で競合するインド人移民に対して反感をもってきたことを指摘する。つづいて地域別検討に移り、ローデシアでは、ヒンズー教徒と回教徒がほぼ半々の割合で居住しており、かれらは概して教育程度が高く、大部分が都市化されているが、1900年代にはいつてから、ヨーロッパ人の間に Kafir truck trader（インド商人のこと）排撃の動きが強まり、連邦時代にはかれらの入移民制限措置がとられたこと、ザンビアでは、ヒンズー教徒が圧倒的に多く、その大部分が南ローデシアのインド人と結びつきがあり、また、1915年に南ローデシアと類似した移民制限法が制定されたが、当局のかれらに対する態度は比較的寛大であったこと、さらに、マラウイでは、回教徒が多く、かれらはた

いてい農村に定着しているが、初期植民地行政官ジョンストンの「ヨーロッパ人による支配、インド人による開発、アフリカ人による労働」というスローガンのもとに、非グジャラティ移民を含めて、この地域に流入したインド人移民は中央アフリカで最も多いこと、などが述べられる。

第3章では、インド人の経済的役割を論じているが、インド人成年男子の大部分が商人であるところから、おもにかれらの商業活動に関する叙述が中心となっている。著書はここで、インド人の商業部門での成功は天性の商才と歴史の幸運によりもたらされたにしても、かれらの禁欲的な生活信条と親族関係を中心とする社会的連帯によるところが多いこと、グジャラティに代表されるインド商人の大部分は農村出身だが、階層的にはパティダール (Patidar) と呼ばれる小地主カーストに属していること、かれらの大部分はほとんど無一文でアフリカに渡り、独力で財産を築きあげたこと、かれらの商業活動はほとんどアフリカ人向け小売業もしくは卸売業に集中されている（ただしザンビアにはヨーロッパ人向け小売業者が若干いる）こと、かれらの収入は主人も雇人もあまり格差がなく、平均月50ポンドぐらいであること、商業利潤の多くは、インド本国にいる親族の生計と教育のため送金され、再投資される額は少ないが、それでもなかには小売業から卸売業、さらに不動産購入という具合に事業を拡大していったものもいること、連邦政府による入移民制限はかれらの行動を大きく制約し、店舗の縮小や売却を余儀なくされたものも少なくなかったこと、などをあげ、さらに結論的に、中央アフリカのインド商人は、かなり手広く商売をやっているものでも、本質的には前近代的な家族経営に依拠しているが、ただかれらがあくまで独立自営の企業家であり、また、富の蓄積をもっぱら個人消費の節約によって実現してきた点で、17世紀ヨーロッパの商人に類似していると述べている。なお、最後に著者は中央アフリカにおける「外来」中間商人として、インド人より前に、イギリス人、ブーア人を除けば、ロシヤ系ユダヤ人、ギリシャ人がいたこと、そして、近年にはインド人に代わってアフリカ人の進出がめざましいことを指摘し、この問題は ingroup と out-group との双方向的交替の過程としてとらえられるべきことを強調している。

第4章から第7章までは、インド人社会の内部的分析で、前章までの外部的分析と対応しており、少なくとも従来の研究書にほとんど分析がみられなかったものだけ

に興味をそそる。ともあれ第4章では、宗教の伝統として、ヒンズー教と回教とを別個に論じており、前者では中央アフリカには本国の複雑な教義や儀礼があまり持ち込まれていないが、古代宗教に特有な超自然力への信仰はしばしば近代都市住民に困惑を与えていること、しかし、ヒンズー教は信仰の対象となる神を限定せず、そのイデオロジカルな内容の変化も許す寛容性と進歩性をもつこと、また、それが仏教・回教・キリスト教および近代科学などの外的攻勢からいつもよみがえり生きながらえてきたという確信から、その規律が観念的教義よりもむしろ具体的行動の中で生かされ、したがってそれが近代化への阻害要因として、ほとんど作用していないこと、などを指摘する。また、後者では、それがヒンズー教よりいっそう農村的、庶民済度的であり、儀礼も比較的簡略で世俗性が強く、かつまた本来平等主義的、民主主義的性格が強いため、かれらの商業活動にはむしろ促進要因にすらなっていることを強調する。

第5章のカースト問題では、伝統的インドにおけるカーストと、近代的中央アフリカにおけるそれとは、全く異なった現象といえるのであり、その遺制はここではきわめてわずかしみられないが、ただかれらの職業・教育・宗教儀式・結婚・集会などにおいてはなお若干の残滓がみられ、それは回教徒においても集団化された形で住民の行動を規制しているという。特に重要な指摘と思われるのは、インド本国では複雑なカースト制度の存在が具体的な社会関係の中でそれを打破しようとする力と結びつくこともあるが、中央アフリカでは、ヨーロッパ人による、人種差別に対する抵抗を弱める効果を伴っている、という点である。

第6章の家族関係の分析では、インド人移民は、都市家族でも5人以上の成員をもつものが圧倒的に多い（マラウイの都市には比較的小家族も多い）けれども、国外に発達したインド文化の規範と価値によって、その形態もしいに变化してきたこと、しかし、経営に関しては植民地政府の法制的不備もあって、あいかわらず家族中心の単純な組合組織が多く、企業自体もたいへい最も古い成員の名のもとに他のものが均等な持分をもつものとして保有されていることを指摘している。

第7章のインド人コミュニティ内の統合と分裂については、宗教・カースト・世代・商売相手などについて詳論されているが、特に、アフリカ生まれの新しい世代において世俗的な適応性をより多く持ちながら、中央アフリカの「複合社会」において他の人種グループと接触す

ることを通じて、かえってインド人の閉鎖的コミュニティをそのまま肯定する感情も湧き、他面、インド人社会の統一のためには固有の社会・文化的諸特性を否定する非インド人になりきらねばならぬというディレンマが存在することを剔出している。

第8章と第9章では、他の種族グループとの関係が述べられているが、第8章のヨーロッパ人との関係について、著者は、moral integration というより ecological integration の問題である（つまり、インド人に対するヨーロッパ人の moral indignation はけっして大きくない）といい、特に、企業間の競合については、ヨーロッパ人側にしばしば意識の分裂がみられるけれども、たとえば、インド人によって駆逐されたユダヤ人やギリシャ人でも、その多くが既により有利な企業に転向してしまったので、インド人に対する偏見は意外に少ないことを示唆している。

第9章のアフリカ人との関係については、商店における物理的接触以外には両者間のコミュニケーションがきわめて乏しいことを強調し、その理由をアフリカ人側とインド人側から幾つかあげているが、特にインド人側の問題として、土着語に関する知識の欠乏を重視し、それに関連して、回教徒はヒンズー教徒よりも土着語への接近が積極的である点を指摘している。

第10章では、インド人移民に対する政府の政策が歴史的に述べられる。特に、南ア連邦のそれと比較して、中央アフリカのインド人がはるかに恵まれた立場にあることを明らかにしている点は説得的である。しかし、著者は同時に、中央アフリカでも、連邦時代に racial partnership のスローガンのもとに、実質上入移民制限を行ってきた政策上の矛盾と、その背景にある政府のオプティミズムを鋭く批判し、それに対するインド人の抵抗のあり方を、熱烈に反対するもの、温和に適應するものおよびアフリカ民族主義の圧力で不承不承に反対するもの、という三つの類型に分け、その動きを具体例をもってあとづけている。また、アフリカ民族主義に対しては、ヨーロッパ人と同様、かれらの自治能力に疑問を抱きながらも、短期的に自分たちの地位が保証されれば、アフリカ人新政府に対して進んで道義的支持を与え、事情の許す限り長く現地に残留しようとするアンビヴァレントな態度が支配的であることを指摘し、その背景として、インド本国政府の政策と、現地インド人移民の利害とに少なくとも乖離が存在することを示唆している。

第11章は、これまでの実証的叙述形式とはうってかわ

り、冒頭に提示した著者の理論的立場にふたたびかえって、既述の諸事実を集約しながら結論を導き出している。すなわち、アフリカ人は非アフリカ人と久しく接触することによって、かれらに挑戦しうる技術的・道義的手段を獲得したから、これまでのような権力的従属関係はやがて清算しうるだろうが、しかし非アフリカ人による文化的影響はなお強くかれらの間に残存するであろうこと、そして、インド人は、アフリカ人が認めると否とにかかわらず、かれらにとってなお必要な存在であり続ける——問題の解決までには幾多の紛糾も予想されるが——であろうことを強調している。

III

以上が本書の要約であるが、評者が一読してまず感じたことは、なによりも周到なフィールド・ワークに裏付けられた実証的叙述の重みである。事実、本書では面接、聴取により記録された当事者の発言がほとんどそのままの形で随所に再現されており、それが著者の論述に大きな説得力を与えている。また、著者が、第1章においてその基本的な接近視角を概略明示し、第11章でそれを受けながら実証的諸事実を集約する形で抽象的に結論づけ、他方、純粹に専門理論の問題提起は、「付録」として別個に掲げたことは、「複合社会」研究というきわめて困難な課題に関する論稿の構成としてまことに手際よく、おそらく今後おこなわれるであろうこの種の著作に対してすぐれた前例を示したものと思われる。

さて以下本書について若干のコメントを加えようとするが、卒直に言って、本書の叙述内容の豊かさに少なからざる感銘を受けた評者には、その事実関係だけでもこれに批判を加えるだけの十分な用意がないことを嘆かざるをえない。したがって、ここでは、主として中央アフリカにおけるインド人の経済的役割に問題を限定し、それに関連する素朴な疑問ないし身勝手な要望を提示することによってコメントに代えたいと思う。

第1には、中央アフリカのインド人移民は“passenger”が主体で、“indentured”がほとんどいないとのことであるが、なるほど Wilson Fox によるザンベジ溪谷砂糖プランテーションのインド人労働者移入計画は、ヨーロッパ人入植者の反対と、インド本国政府の非協力により失敗に終わったとしても、ブラワヨ鉄道の建設には、どうして東アフリカにおけるウガンダ鉄道の場合のようにインド人労働者が需要されなかったのか、それは、中

中央アフリカにグジャラティの大地主階層のものだけが流入したこととどのように関連づけられるのか。

第2に、インド人商業の経営資金調達については、ヨーロッパ人間に伝説化された Bombay Investment Company という幻の金融会社の名が引合いに出されているが、インド人移民の商業利潤は実際にどれくらい本国に送金されていたのだろうか？ もちろん、著者のいうように、その大部分は本国にいる親族の生計と教育のために送金されたことはまちがいないにしても、その金融者は意外にヨーロッパ人商社であって、それからの貸付金に対する利子支払は決して少なくない額に達していたのではなかろうか。

第3に、インド商人がアフリカ人向け日用雑貨品の販売を中心にして進出していったことは明らかだが、中央アフリカではかれらが逆にアフリカ人の生産する穀類や家畜を市場化するための仲介取引をあまりしなかったのはなぜなのか、もちろんヨーロッパ人政府が設立したマーケティング・ボードによって事実上それが代替されたとも考えられるが、ボードに納入されたアフリカ人生産物は通常全体のわずかな部分をしめるにすぎなかったといわれるからである。

第4に、中央アフリカのインド人が小規模工業に進出

しなかった理由として、著者は資本と経験の不足をあげているが、その点では、多くのインド人が、繰綿工場を設立してきた東アフリカの場合とおそらく同じではないか、中央アフリカでは、1961年にソールズベリにインド人繰綿工場設立の試みがなされるまでは、かれらはもっぱら卸売業の拡張や不動産投資をしていたわけであるにしても、その投資額自体は、小規模工業の設立が全くできぬほど小額のものではなかったと思われるからである。

最後に、植民地行政官ジョンストンの政策や、ジャック・レポートの勧告などにより、中央アフリカでは最もインド人移民が多く、またその商業活動も盛んであったマラウイにおいて、小売業のアフリカ人化も最も早くから進んだのはなぜか。それは、この地域のインド人に農村に定着した回教徒が多かったことと関係があるのか。また、シーク・ゴア・パンジャビなど非グジャラティが流入してきたことと関係があるのか。いずれにしても教育程度が低く、商慣習のほとんどなかったアフリカ人は政府の行政指導だけで小売業に従事しえたと想像することはむずかしいからである。

(調査研究部主任調査研究員 星 昭)

アジア経済研究所刊行

研究参考資料第137集

天然ゴム——その産業構造

深 沢 八 郎 著
B5判/80頁/¥250

▷生産組織とそのBehavior/生産の規模別構成/エステートの生産組織とその Behavior/小規模生産の組織とその Behavior
▷流通・取引組織/流通機構/ヨーロッパ人エステートの流通・加工組織/小規模生産における流通・加工組織/輸出市場における取引組織▷むすび——生業構造と政策

外国の企業 12

シンガポールの創始産業

原 田 忠 夫 編
A5判/202頁/¥600

I 概況 II 業種別国別出資額一覧 III 企業別国別出資額一覧
IV 業種別企業別本表 (1)食品工業 (2)繊維工業 (3)木材・紙・家具製造業 (4)化学工業 (5)石油製品製造業 (6)ゴム製品製造業 (7)皮革工業 (8)窯業 (9)鉄鋼業 (10)非鉄金属工業 (11)金属製品製造業 (12)機械製造業 (13)電気機械器具製造業 (14)輸送用機械製造業 (15)その他の製造業 (16)非製造業

アジア経済出版会発売